

第7分科会

研究主題

生徒が自ら課題解決に取り組む 体育学習の在り方

ーグループ学習・学習カードの活用を通してー

松江市立宍道中学校

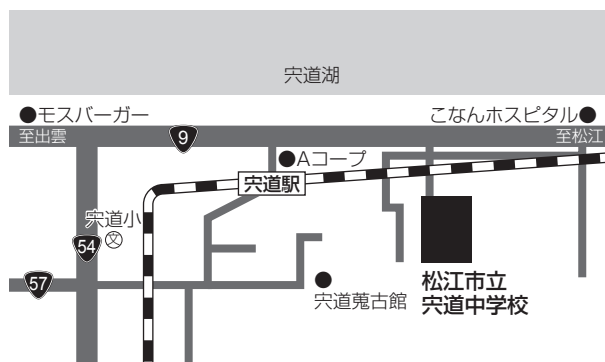
日 程

9:00	10:00	10:50	11:00	11:50	13:00	13:15	13:45	14:30	14:50	15:00
オリエンテーション 受付	公開授業① (3年)	移動・休憩	公開授業② (1年)	昼食・休憩	開会行事	研究発表	研究協議	指導講評	閉会行事	

公開授業案内

	学年・単元名	会 場
公開授業①	3 学年・バレーボール・バドミントン	体育館
公開授業②	1 学年・長距離走	校庭(雨天・体育館)

学校所在地図



交 通 機 関

公共交通機関またはタクシー利用の場合
 ・松江駅より山陰本線「宍道」下車、徒歩約20分
 (ピストンバスを輸送)
 ・松江駅よりタクシーで約20分、約4000円

お車でお越しの場合
 ・国道9号線から出雲方面へ
 J R 宍道駅手前 500m左折

学校概要

学校名称	松江市立宍道中学校		
校長氏名	細木 保秀		
学 級 数	10学級		
生 徒 数	265名		
所 在 地	〒699-0401 松江市宍道町宍道351		
電 話	0852-66-0854	F A X	0852-66-0076
U R L	http://www.shinji-j.matsue.ed.jp/	E - m a i l	school-j@shinji-j.matsue.ed.jp

【学校紹介】

本 校 の 教 育

校訓 自主 友愛 創造

1 教育目標

ふるさとを愛し、心身ともにたくましい 実践力をもった生徒の育成

2 学校経営方針

- 全教職員の共通理解を基盤に、教育における不易と流行のバランスを図る。
- 夢やロマンが語れる場の構築と生徒の「生きる力」の育成を図る。
- 共働、共汗、共喜、共涙の教育の創造を図る。
- 家庭や地域との連携を大切にし、信頼される学校づくりに努める。
- 安全で安心して楽しく学べる学校づくりの推進を図る。

3 学校経営の重点

- (1) 道徳、人権同和教育を基底にすえ、あいさつ・マナーなど基本的生活習慣を重視する。
- (2) 基礎・基本の習得とわかるたのしい授業づくりに努める。
- (3) 生きて働く力を育む教育活動の充実と弾力的な教育課程の編成を図る。
- (4) 生徒指導の充実を図り、生徒が自らの進路を切り拓いていくたくましさを育成する。
- (5) 人間関係力、精神力、体力等「生きていくための判断力や実践力」を養う生徒会活動と部活動の充実を図る。
- (6) 家庭、地域、関係機関と連携した教育活動の推進とゆとりと潤いのある教育環境の整備に努める。
- (7) 小中一貫教育を推進する中で学校課題への取組に努める。

松江市の学校教育プラン —4本柱—

- ① 確かな学力を育成するための教育を推進します。
- ② 豊かな人間性をはぐくむための教育を推進します。
- ③ 児童生徒の健康と体力を増進するための教育を推進します。
- ④ 松江市の特色を生かした教育を推進します。

小中一貫
教育の推進

研究主題

生徒が自ら課題解決に取り組む体育学習の在り方 ーグループ学習・学習カードの活用を通してー

松江市立宍道中学校

1 研究主題設定の理由

(1) 学校教育目標、研究主題の視点

本校は、松江市西部旧宍道町のほぼ中央、北に宍道湖を望む自然環境豊かな丘にある。宍道は古くから農業の他宍道湖でのシジミ漁などの漁業、来待石加工など特色ある産業が営まれており、地域には体験的な学習の場の提供など多く協力をいただいている。そんな温かい環境の中で育った子どもたちは、概ね純朴で人の気持ちに応えようとする優しさがあるが反面集団生活では、周囲とちがう考えを表現することに抵抗感をもつ生徒も少なくない。また、与えられた課題に対して真面目に取り組むが、自ら課題を見つけ解決していく方法を工夫することは苦手な傾向にある。一方、中学校では自分の人生を切り拓いていくたくましさを培う土台づくりが大切であると考えている。

そこで、本校では「ふるさとを愛し、心身共にたくましい実践力をもった生徒の育成」を教育目標にかかげ、これに迫るための生徒像を

『ふるさとを愛し』

①ふるさとへの愛着を深め、ふるさとに誇りをもつ生徒

②広く世界に目を向け、自国の自然・伝統・文化を尊重し社会に貢献する生徒

『たくましい実践力』

①たくましく生きていくための「学力」を身につける生徒

②たくましく生きていくための「心」を耕す生徒

③たくましく生きていくための「体」を鍛える生徒

としている。また、研究主題は「自ら学ぶ意欲をもち たくましく生きる生徒の育成～関わり合い高め合う中で、課題解決を図る指導のあり方について～」としている。その理由として「関わり高め合う」は、学校内やふるさとの様々な「人・こと・もの」との関わりをもつことで視野が広がり、ゆくゆくは社会に対して自分にできることを考え実践していく力となるのではないかと考える。そして「心身共にたくましい実践力」を培う中で、他との関わりで生まれた力がバネとなり、問題を解決する方法を見つけ、困難に対しても諦めず強く生きていく心と体が育っていくのではないかと考え研究を積み重ねている。

(2) 保健体育科研究主題の設定理由

21年度に向けた研究に当たっては、保健体育科としては「たくましい体と心」を育み、高めていくために必要な力として、「自己課題解決力」に着目して研究を進めることとした。

そこでは自他を客観的、主観的な見方をバランスよく使って「わかる・できるようになる」為に

○必要な自己の課題を見つける。[Plan]

○その解決のために必要な手立てを「個人」または集団の中で模索、実践する。[Do]

○自らの活動の結果を評価する。[Check]

○次への新たな課題や目標の設定ができる。[Action]

このような力を持った生徒を育成する手立てとして保健体育の授業の中で「PDCAサイクル」の構造を基本とした課題解決型学習を実践することとした。

2 研究の枠組み

(1) 研究の構想

①研究の方法

- ア 自己、および他者からの評価をもとに次の課題を見つけ、その解決に向けて具体的な方を生徒自身に考えさせ、実践につなげていく。
- イ お互いに学び合い、高めていく点を考慮してペア、グループでの学習を基本とする。
- ウ 学習カード、資料を効果的に活用し、活動の成果や課題を分かりやすくして意欲的な活動につながるようにする。
- エ 努力を要する生徒への個別の支援の内容や方法を実践していくとともに、授業の中で生徒同士がお互いに活動する場面を作り、相互支援の形を構築する。

②研究の視点

本校の体育学習では、一人ひとりが自分の課題を見つけ、主体的に学習に取り組むことで自分を高めていこうとする生徒の育成を目指している。

そこで生徒の実態（体力、コミュニケーション能力）を踏まえた上で主体的に学習に取り組める場面や一人ひとりが自己を評価して新たな課題やめあてを考える場面を設定して課題解決能力を高めていきたいと考える。

授業実践として、1学年では長距離走において長い距離を続けて走ることで長距離走に対して自分に必要な体力的な要素、長距離走の技術を理解し、グループ・ペアでの活動の中で自己の課題を主体的に解決する姿勢や能力を育てていきたい。

2，3学年の選択体育では、自ら選択した種目において仲間とのグループ・ペア学習を通して、コミュニケーション能力を高めながら、個人、グループ・ペアの課題を解決していく力をつけさせたい。



(2) 研究種目

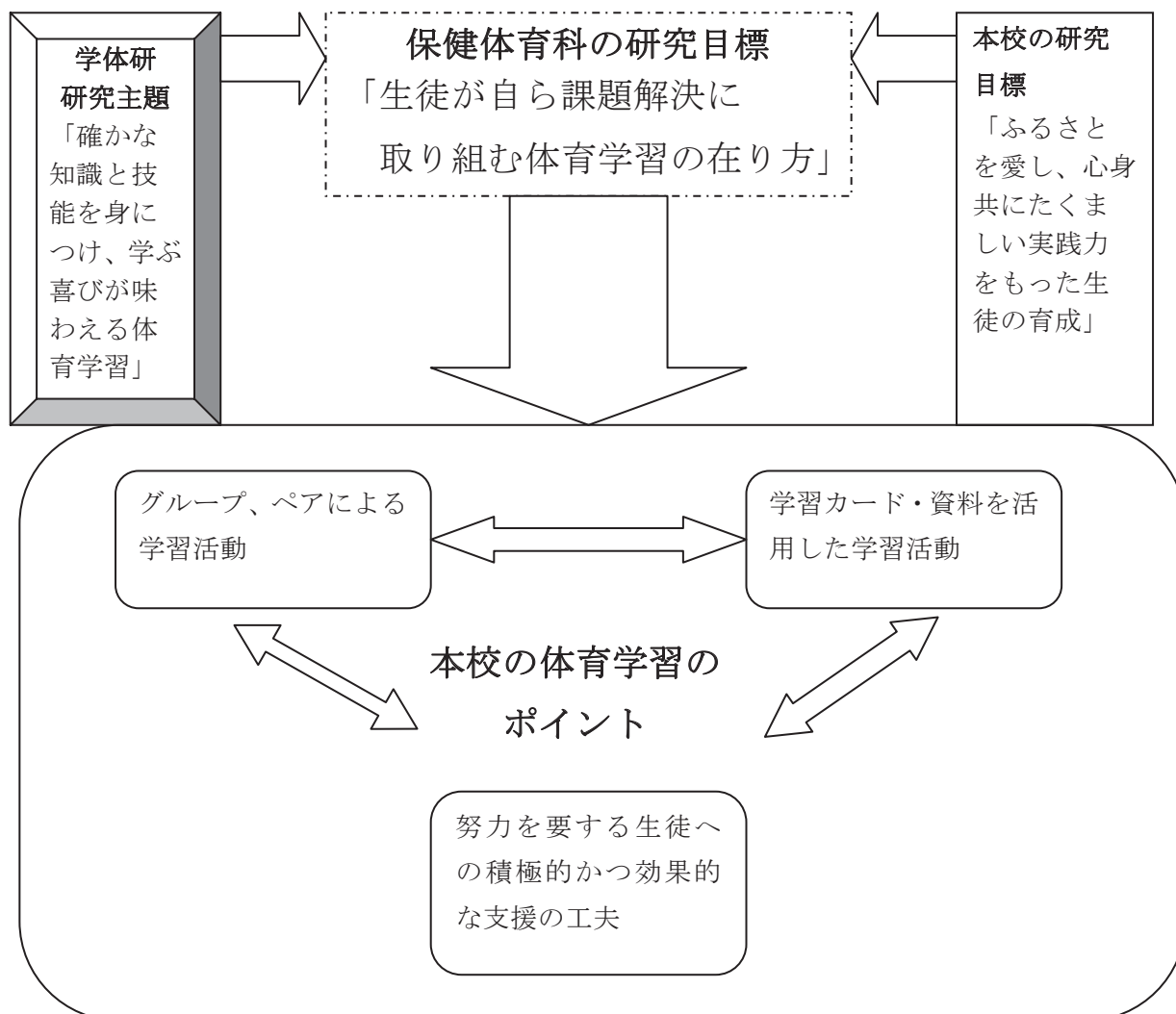
①陸上競技 ～長距離走～ 1年生

一定の距離をあらかじめ決められたペースで走り続けるという目標があり、生徒にとっては苦手な意識が強い種目である反面、個人の取り組み次第では伸びが期待でき、継続して練習に取り組む、さらに高めていこうとする姿が期待できるという点から長距離走とした。

②球技選択 ～バレーボール・バドミントン～ 3年生

ネット型球技でも、生徒にとっては『レクではやったことがある』『未経験で知らない』に分かれ、それぞれゆえに関心が高い。バレーボールについては1，2年生では必修だが、生徒の実態として技能の高まりは十分とはいえない。よって、生徒のニーズと技能の高まり、意欲の高さから力強さ・正確さ・持久力等の総合的な体力と精神力を要求される2つの球技を選択制として取り上げた。

③研究の構想イメージ



3 研究の実践

(1) 生徒の実態と研究の視点 (仮説)

①長距離走

真面目で活発に活動し、男女を問わず仲間と協力してさまざまなことに取り組むことができる生徒が多い。学習に意欲的に取り組み、準備や片付けを含めて学習活動全般にわたって熱心に活動できる。また、学習カードの活用は小学校のころから始まっており、中学校1年生の段階から記入する内容や活用の方法をよく把握している。ただ、学習カードの内容から自己の課題や弱点、伸ばしていきたいポイントなどを導くことができる生徒は少なく、解決に向けての練習内容の工夫や、仲間へのアドバイスなどには不十分な面が見られる。

長距離走という内容については一般的には苦手な生徒や嫌いな生徒が多い傾向がある。本校の生徒については苦手であるが嫌いではない、タイムや距離が伸びることに充実感を感じる生徒が多い実態がある。

学習指導要領の1，2年生の内容では、具体的に「あらかじめ決めたペースで設定した距離を走ること」「腕に余分な力を入れないでリラックスして走ること」「自己に合ったピッチとストライドで、上下動の少ない動きで走ること」と例示されている。このことを生徒が実践し、練習で動きを高めて行くことができればタイムを短縮できると考えた。

②バレーボール・バドミントン

男，女とも仲が良く，さまざまな活動に協力的かつ意欲的に取り組むことができる。アンケートにおいても，体育の授業に対して肯定的に捉えている生徒がほとんどで活発な活動が見られる。

バレーボール，バドミントンについては比較的取り組みやすいと考えおり，休憩時間に体育館などで友達と行っている姿がよく見られる。その反面，レクリエーション的なとらえ方をしている生徒が多く，正式なルールや技術での実践は経験が浅いのが実態である。

このような実態から簡単なボール操作などの技能面の深まりとルールの理解を進め，仲間との連携の中から作戦やフォーメーションの方法などを学習させればより深く種目の特性に触れることができ，楽しさと充実感を味わわせることができると考えた。

(2) 研究の具体化

[長距離走]

①課題解決型の学習

ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○課題を見つける力，目標を設定し，その達成に向けて練習を工夫，実践する力をつける。 ○単元の前半と後半で課題に応じた練習内容の変更ができる。	○今できること，自分の力について，客観的に理解することでワンランク上の技能の特定や一人ひとりの実態に応じた時間，距離の設定が的確にできることを目指して指導を行った。

②グループ・ペアによる学習活動

ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○グループ，ペアでの活動を取り入れることで生徒同士の相互支援，相互評価からの課題発見，解決の手立てとする。 ○グループでの関わりの中からコミュニケーション能力を高め，他者の考えと自己の考えを合わせてお互いに補い，支え合う力をつける。	○練習内容別に2～5名程度のグループ・ペアを構成し，練習に取り組む。 ○設定タイムや距離にあまり差がないように同レベルのグループとした。 ○男女を問わず積極的な活動につながるグループ・ペアの構成を行った。

③学習カードの活用と教具，活動の場の工夫

ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○学習カードと資料は授業の流れの把握や計画，練習の振り返り，次の課題と目標設定の手段として用いる。 ○練習内容によって異なるコースの特性を理解して，自己の設定した内容に従って練習に取り組むことができる。	○学習カードは課題や目標設定がしやすいように項目を設けて活動が分かりやすく，振り返りからさらに高い目標を設定しやすいようにまとめた。 ○練習内容，課題によってそれぞれ異なった距離やコース設定を行い，より課題を意識できるようにした。

④努力を要する生徒への効果的な支援の工夫

ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○対象生徒一人ひとりについて、指導者側がきちんと理解し、適切な指導を行うことと、仲間同士での教え合いや励まし合いの中で、支援を要する生徒が活動への意欲を低下させることなく、積極的に活動し、確実に力をつけていく。	○意欲、技能が高い生徒とグループ・ペアの構成を行い、集団での学習意欲の高まりから個の活動の積極性を引き出す。 ○目標、ねらいの設定をさせることでこの課題の明確化を図る。

[バレーボール・バドミントン]

①課題解決型の学習

ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○授業形態では、一斉指導の授業から、仲間との関わりを大切にしながらグループ学習への転換を図る。 ○見つけた課題を克服するために課題練習を計画的に行い課題練習が次のゲームにつながっていくように取り組ませる。 ○ゲームや前時の授業から個人やグループの課題を見つける。	○課題を発見するために、個々からグループでの教え合い学習を進めていく。 ○仲間との関わりの中で、課題解決のための学習を工夫しながら練習に取り組む。 ○具体的な授業の流れとして、球技等では生徒が好きなゲームを通して『①前時の授業から本時の授業のめあてを確認する。→②試しのゲームからグループの課題を確認する。→③グループの課題練習を行う。→④本時のゲームへつないでいく。』一連の流れをつくっておく。

②グループ・ペアによる学習活動

ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○仲間の助言や技能的な支援を得る中で、練習に意欲的に取り組む姿勢をつくる。また、お互いに技術を分析し、技能の向上を図れるようなグループ構成とする。 ○意欲的に活動する生徒を育成するためにグループで話し合いや活動の場面を多く設定し、お互いに不十分な点を補い合わせる。	○ペア・トリオ・グループ学習から互いに課題を教え合い、グループで協力して取り組む流れを生徒が理解し、実践していく。 ○新たな練習方法を発見し、互いに教えあい励まし合いながら、技能の向上に取り組むグループ学習を展開するために中心となるリーダーを育てていく。

③学習カードの活用と教具、活動の場の工夫

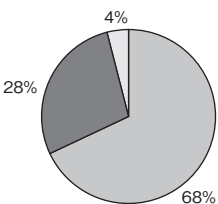
ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○毎時間後、振り返りをしてグループの課題を考え、その解決に向けての練習方法を模索する。 ○個とグループの課題を明確にし、カードに記入することで生徒自身が本時の学習のねらいを明確に理解する。	○グループのめあてや課題、課題練習、本時の反省が生かせる学習カードを準備する。 ○個人ファイルを活用し、自己の課題や技能の到達を確認し自己評価させ、次時の活動に生かす。 ○生徒にとって分かりやすく、活用できる内容のカード、資料の作成に留意する。

④努力を要する生徒への効果的な支援の工夫

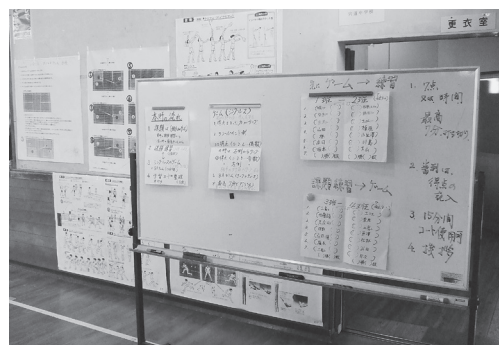
ねらいと理想の生徒の活動	手立て
○つまづきを感じている生徒，活動が不活性になっている生徒を教師が一人ひとり理解し，原因を探りながら適切な指導を行う。 ○仲間同士の教え合いの中で活動が不活性になっている生徒の意欲が高まり，学習に意欲的に取り組み，学習成果が高まる。	○意欲，技能が高い生徒とグループ・ペアの構成を行い，集団での学習意欲の高まりから個の活動の積極性を引き出す。 ○目標，ねらいの設定をさせることでこの課題の明確化を図る。

4 研究の実際と成果

[長距離走]

	成 果
課題解決型の学習	長距離走の指導計画の中で，前半と後半で個の課題に応じて練習内容を変更できるようにした。一人ひとりが前半練習に取り組み，その結果，後半では別の練習に取り組む生徒，同じ練習内容でタイムや距離の設定を変えた生徒が全体の90%を超えた。さらに学習カードの内容から生徒が自己の課題を捉え，解決に向けて練習に取り組むことができるようになった。PDCAサイクルを定着させるために繰り返し支援や指導を行い，体育学習全体を通してこの学習形態が定着しつつある。 前半と後半で練習内容を変更したか。  68% 28% 4% ■前半と後半で練習内容を変更した生徒 ■変更せず、距離やタイムの設定を変更した生徒 □全く変更しなかった生徒 Q練習内容を変更した理由 ・前半の練習内容の目標が達成できたから ・自分の課題に合っていなかったから。 ・違う練習をして，もっと速くなりたいと思ったから。 Q練習内容を変更しなかった理由 ・同じ練習で設定タイムを速くしていったから。 ・前半の練習が自分に合っていたから。 ・他の練習が自分に合っていなかったから。
グループ・ペア学習	同じ練習内容の生徒同士でグループを構成して活動に取り組んだが，お互いにタイムを計測し合ったり，声をかけて励まし合うなど意欲的かつ，協力的な姿が多く見られた。また，活動の中で自己の課題やその解決方法を他者から客観的に指摘されたり，アドバイスを受ける場面が指導者側の想定よりも多く見られた。  

	成 果
課題解決型の学習	○グループや個人の課題を見つけるために、話し合いの時間をもち、その課題解決の練習を取り組んでいく中で、グループで協力して練習やゲームを行う姿が見えてきた。 ○個人においても、課題解決のために自ら考え主体的に活動する姿が見えてきた。 ○ゲームにおいても勝敗だけにこだわらず、グループや個人の課題は何か、というところに着目して活動するようになってきた。
グループ・ペア学習	○課題解決のためにグループで協力して活動していく姿が多く見られるようになった。 ○充分満足できる生徒であっても、つまずきを感じている生徒への支援によって学習内容などを再認識でき、グループも機能するようになった。 ○教師指導型の一斉授業で流していくと、技量に自信のない生徒は活動が消極的になってしまいが、グループ学習を行うことで意欲的な活動が見られるようになってきた。
学習カード、教具・場の設定の工夫	○個人やグループの本時のめあてが具体的に分かり、グループで協力して活動する姿が見えてきた。 ○毎時間のめあてを確認し、授業の中で取り組んでいく内容が誰もが理解できるようになった。 ○学習カードを記入することによって、誰もがグループの課題を共有することができるようになった。 ○次時のめあてが明確になり、意欲的な活動に結びついている。
努力を要する生徒への支援の工夫	○仲間同士の教え合いや教師からの支援によって、活動が不活性な生徒やグループが「わかる」「できる」ようになりたいという気持ちになり、行動に積極さが少しずつ表れてきた。 ○周囲からの声かけを自己の中に取り入れ、意欲的な活動につなげることができたり、自己の課題の克服のために必要な方法を考えることができるようになった。



5 研究のまとめ

本研究では『課題解決力』をキーワードに「グループ・ペア学習」，「学習カード・資料の活用」，「生徒への積極的・効果的な支援」という視点から研究を実践してきた。そこから以下のようなことが見えてきた。

[見えてきたこと]

- 生徒が自ら考え、主体的に行動する課題解決型の学習によって、ただ、活動を行っているだけでなく、「わかった」「できた」という経験をすることから、「もっとやってみよう」「楽しい」「できてうれしい」といった達成感を味わい、次の学習への意欲につながっていくことが確認できた。
- 課題解決型の学習について、生徒に時間的なゆとりを持たせて、じっくりと学習や仲間とのコミュニケーションをとる場面を確保することで生徒の中から課題が生まれ、解決への糸口を見つける場面が授業の中で見られるようになる。また、学習のねらいや教師のねがいを生徒にきちんと伝え、教師も生徒もはっきりとした見通しをもって学習活動に取り組むことが学習成果を上げる要因になる。
- グループ学習について、ペア・グループ学習の導入のタイミングを十分に考慮する。学習のねらいとその達成に応じた学習形態の選択が重要である。グループによっては学習意欲に差があり、その結果として成果に差が生じるため、グループ編成の方法については生徒の実態や学習内容を熟慮して行う必要がある。種目によってはグループの構成(人数、男女)を効果的に変更し、学習意欲の向上を図っていくことが重要である。
- 学習カード、資料の活用について、課題解決型の学習に大きく関係するため、生徒に活用する方法をきちんと理解させなければならない。本時の振り返りから次時への課題、見通しの持たせ、課題の再発見を学習カードの中で行い、確認ができればスムーズに学習を進めることができる。
- 個々の生徒への支援について、努力を要する生徒、つまずきを感じている生徒への適切な支援、指導のバリエーションを教師側が準備しておくといよい。授業時間内での適切な支援のタイミングの方法を工夫するために、ビデオを用いたなどの視覚的な支援などの工夫が効果的である。

[課題]

- 生徒が授業の楽しさを感じるポイントとして、単元(種目)自体の楽しさもあるが、適切な課題を持たせ方による学習意欲の向上をねらった教師の支援が重要である。
- グループ編成や生徒同士、教師との関わりによっては学習効果に差が生じることがあった。このことから、体育の場だけではなく、学校全体の中で周囲との関わり合い、コミュニケーション能力の育成、自己や他者を客観的による能力、そのことを正しく伝えてお互いに高めていく力の育成が今後の課題と考えている。
- 学習カード・資料について課題解決に手立てとして生徒が使いやすく、授業の中で活用できる資料が必要である。また、運動量の確保というポイントから生徒が時間をかけず振り返りと課題の解決へのプロセスが認識できるものがよい。
- 生徒への支援は努力を要する性だけでなく、ねらいを十分達成している生徒への発展的な学習という両側面の支援が必要である。

